

スウェーデンの義務教育における 「共生」(Samlevnad)のカリキュラムに関する研究

戸野塚 厚 子*

Atsuko TONODUKA

1. 研究の目的と先行研究の検討

本研究は、「共生」(Samlevnad)という教育理念が1960年代から2000年代にかけて義務教育課程の中で制度化された諸過程を明らかにしようとするものである。したがって、本研究では「共生」という教育理念がスウェーデンの国レベルのカリキュラムであるラーロプランに具現化され、教育実践として内実化されていく諸過程を検討する。

スウェーデンでは、9年制の基礎学校が成立した1962年にラーロプラン(Läroplan)が告示され、それ以降69年、80年、94年と改訂が行なわれてきた。その中で、「共生」等の現代人が直面する課題については、62年版から複数教科を横断させる教育内容の項目(Speciella Moment)として特設されてきた。特に、80年版ラーロプランでは、社会民主労働党のインテグレーション政策に呼応し「性と共生」を中心としたカリキュラムから「他者との関係」、「障害者との共生」、「移民との共生」へと内容が拡大されるとともに、低学年からスパイラル方式で取り上げることが明示された。94年版ラーロプランにおいても、「共生」は「教科横断的な学習」として義務教育課程に位置づけられている。

このように、スウェーデンは、1960年代から「共生」を義務教育課程に導入し、独自の展開をしている国である。では、なぜ、スウェーデンでは「共生」を制度化することが可能だったのか、現時点でこの問いに答える先行研究は見当たらない。スウェーデンの性教育に関する代表的な研究としてビヤネール(1976)と北沢(1988)の研究がある。しかしながら、それらは「共生」の文脈で捉え、研究していたかと言えば必ずしもそうとは言い難いし、「共生」のカリキュラムの実現の

※カリキュラム

諸条件にまで踏み込んだものではない。中嶋(1965,1981,1989)の研究は、義務教育制度やラーロプラン、そして教科書の変遷を考察していて、その概要を掴むには有益であるが背景やそれを支える要因の具体的な解明を目的としたものではない。本研究の独自性を先行研究の成果に照らしていえば、「共生」が義務教育課程に教育内容として取り上げられた経緯、国レベルのカリキュラムであるラーロプランに整備され、実施されていくプロセスを解明することにある。

2. 研究課題と方法

前述の研究目的を達成するために、①本研究で使用する用語とその概念を整理し、研究の対象を明確にし、その上で、②ラーロプラン改訂を中心とする内容改訂の系譜に対応させながら、5点の研究課題を設定し研究を進めることとした。

第1の課題

ラーロプランと学習材としての教科書(Läromedel)、そして筆者が調査した事例を手がかりに、小学校段階と中学校段階の教室の一場面を紹介する。そこから近年の「共生」のカリキュラムとその特徴を概観し、予備的検討を行う。具体的には、94年版の内容の検討を試みた上で、その史的展開とラーロプラン改訂システムを検討する必要性を指摘する。(第1章)

第2の課題

「共生」のカリキュラムが94年版に至るまでの史的展開の過程を解明する。まずは、62年版、69年版、80年版と学習材としての教科書を手がかりにその時代の「共生」のカリキュラムの特徴を明らかにする。次に、その特徴を政府公式調査(答申)やラーロプラン作成の関係者に実施した聴き取り調査記録を基に各時代の社会的文脈に位置づけて検討する。(第2章)

第3の課題

なぜ、スウェーデンでは「共生」のカリキュラムが制度化されたのか、そのプロセスと基盤的要因を検討する。そのため、国会議案(Prop)、答申(SOU)、調査報告書、聴き取り調査記録を手がかりとして、①各ラーロプランの改訂の背後にあった社会政策、②教育改革のための調査と報告書を取り上げ、その上で、③ラーロプラン改訂システムを解明する。(第3章)

第4の課題

ラーロプランレベルで捉えてきた「共生」のカリキュラムを実践レベルで

検討し、そこから「共生」のカリキュラム実践を支える条件を導き出す。続いて、「共生」のカリキュラムの評価を、研究者、実践者、行政官等に実施した聴き取り調査記録を基に検討する。スウェーデンには、授業記録や指導案を作成して共有する文化がない。そのため、筆者がストックホルムの基礎学校で観察を通して得た記録を基に、実像に迫る。 (第4章)

第5の課題

研究の成果を要約し、結論として「共生」のカリキュラムの制度化とその基盤的要因を整理する。最後に、日本のカリキュラムの比較研究と教育実践への示唆を含め総括的な考察を行なう。 (終章)

3. 研究成果の要約

第1－第5の研究課題をとおして明らかとなった成果を整理すると、「共生」のカリキュラムの制度化は、直接的制度化と間接的制度化に分けられる。直接的制度化とは「共生」という教育理念がラーロプランに整備され、教科書に具現化することを指し、間接的制度化とはそれらを実現させた要因（基盤的要因）を指す。

直接的制度化に関する研究の成果は、1960年代からのラーロプランと教科書を基に、カリキュラムの縦軸と横軸、「共生」の内容や解釈、取り上げ方等、カリキュラムの特徴と史的展開を解明したことである。「共生」のカリキュラムの萌芽期（62年版、69年版）が「性と共生」に特化された傾向にあったのに対して、充実期（80年版）では、「性と共生」、「障害者との共生」、「移民との共生」、「大人と子どもとの共生」と内容が広がり、教科横断型のカリキュラムとして具体化された。ラーロプランにおいて、少ない内容が取り扱われていた時には問題にならなかった系統性やカリキュラムの形態が、内容の拡大にともなって問われるようになったのである。

カリキュラムの系統性の観点から言うなら、「他者との関係」は低学年（1－3年）、中学年（4－6年）、高学年（7－9年）を貫くものとしてラーロプランに記載されており、繰り返しながらも発達段階に応じた高次なものとなっていた。ラーロプランには、低学年では「集団と個の関係、日常のいざこざ、性と共生への問い、障害の概念」、中学年では、「低学年で取り上げた方向性に沿った形で」、高学年では「低・中学年で取り上げられた方向性に沿った形で」と記されており、縦のつながりを意識した記述がなされている。さらに、中学年はいじめ、高学年

になるにしたがって性役割、性と共生、共生への問い、国際世界のいざこざへと重点項目が移行し、身近な問題から世界へと同心円的に視野を広げる構成になっていることが明らかとなった。

教科間の関連性については、80年版の教科書において、他教科の関連等、横軸が意識された記述を確認することが出来た。そして、「共生」の内容は、概念的理解を重視したもので、学習することの意味、必然性が意識化されたものとなっていた。

第二の間接的制度化については、「政策化された基盤要因」と「授業に浸透させた背景的要因」に分けて検討した。第3章で検討したように、「政策化された基盤要因」としては、①「共生」を目指す社会理念、②「共生」のための政策、政策を実現するための調査、報告書、③「共生」を制度化したラーロプラン改訂システムの存在を確認した。次に、「授業に浸透した背景的要因」として、第4章で解明した実践基盤、①目標や基本的価値の共有（国レベルの管理と実践レベルでの自由度のバランス）、②学校の自由度の高さ、③教師の自立性、④教師継続勤務による集団の定着化、⑤「共生」を浸透させていく装置としての教科書、⑥教科の枠を越えた学習を推奨してきたことの6点について総括した。以上の実現要因は相互に関連しあっている。合意形成を重視した改訂システムが、基本的価値を共有するのを可能にしているのは、その一例である。要は、レミス（Remiss）制度、学校教育庁発行の「ラーロプランについての討論」によって、教師たちと意見交換をし、合意形成を図りながら改訂するため、目的や価値が共有されやすくなっているのである。

最後に、カリキュラムの比較研究への示唆として、次の二点について述べる。

第一に、他国のカリキュラムを検討する上で、その国の教育用語をどのように表現するか、日本語に置き換える時には、その共通性と違いを検討し、註釈する必要があることを強調したい。先行研究の分析を通して、日本の教育用語に置き換えたばかりにその国の特徴や日本との差異を見逃す危険性があることを確認した。他国の教育を理解する上で、その用語が指し示すものを吟味し、日本語との共通性と違いを検討することが前提となる。場合によっては原語を採用することで、その国の教育の特徴が損なわれることがないよう配慮する必要がある。これが、カリキュラムの比較研究をする上での方法論に関わる示唆である。

第二に取り上げるのは、カリキュラムの改革過程、展開過程を長期間にわたっ

て研究することの意義についてである。本研究の成果は、制度化の諸過程、「共生」が制度化されたメカニズムとその基盤に関する要因を解明するという研究の視角をとったことによって明確にされたものである。このことは、通史や制度の概観ではなく、カリキュラムが社会理念や政策等、複数要因との関わりの中で変化し継承されている、そのプロセスにまで踏み込んだ研究の意義を日本のカリキュラム研究に示唆している。

主要引用・参考文献

- ・ ビヤネール多美子(1976)『スウェーデンの性教育と授業革命』晶平社
- ・ Hydén, Görel (1992). *Här hos oss 2*, Bonniers.
- ・ 北沢杏子 (1988)『ひらかれた性教育4』アーニー出版
- ・ Iisling, Åke. & Cullert Bengt (1964) *MÄNNISKA, NATUREN OCH SAMHÄLLET*, Almqvist & Wiksell.
- ・ Lundgren, Ulf., Svingby, Gunilla., Wallin ,Erik(1981). “Från Lgr69 till Lgr80 Erfarenheter från SÖ:s läroplansarbete”, rapport i från SÖ -Projektet 2165.
- ・ Mårtensson, Ralph (1995). *Människoboken*, Almqvist & Wiksell.
- ・ 中嶋博・鈴木慎一・天野正治 (1965)『福祉国家における教育』南窓社
- ・ 中嶋博 (1981)「スウェーデンの学校」『世界の学校』福村出版
- ・ 中嶋博 (1989)「スウェーデン教科書改善の動向」原田種雄研究代表『教科書の質的向に関する総合的調査研究成果報告書』教科書研究センター, 266-280頁
- ・ Prop (1975/76:39). *Skolan Inre Arbete*, Regeringens proposition, Stockholm.
- ・ SIL (1986). *INTERKULTURELLT SYNSÄTT* i undervisning läromedel.
- ・ Skolöverstyrelsen (1969). *Läroplan för grundskolan Lgr 69*, Utbildningsförlaget, LiberAB, Stockholm.
- ・ Skolöverstyrelsen (1977). *Samlevnadundervisning*, Liber.
- ・ Skolöverstyrelsen (1980). *Läroplan för grundskolan 80*, Liber Utbildningsförlaget.
- ・ Skolöverstyrelsen(1994). *Läroplan för det obligatoriska skolväsendet, förskoleklassen och fritidshemmet*, Liber Utbildningsförlaget.
- ・ SOU(1993:2)(1994). *Kursplaner för grundskolan, Lpo94*, Utbildningsdepartement
- ・ Teveborg, Lennart (1999). *UPPSLAGS BOKEN OM GRUNDSKOLAN*, Ekelunds Förlag AB.

論文構成

序章 緒論

第1節 問題の所在	5
第2節 研究の目的, 課題, および方法	16
第3節 論文構成	30

第1章 「共生」(Samlevnad) のカリキュラムの予備的検討	
第1節 基礎学校の教室の一場面	39
第2節 「共生」のカリキュラムの特徴に関する予備的検討	43
第2章 「共生」のカリキュラムの史的展開	
第1節 「共生」のカリキュラムの萌芽期	76
第2節 萌芽期(62年版・69年版)の特徴	87
第3節 「共生」の教科横断型カリキュラムの充実期	92
第4節 充実期(80年版)の教育内容とその編成	110
第3章 「共生」のカリキュラムを実現させた社会政策と 調査に基づくラーロプラン改訂システム	
第1節 「共生」のカリキュラムと社会政策	132
第2節 「共生」のカリキュラムの制度化に向けての調査・答申	147
第3節 合意形成を重視したラーロプラン改訂システムとその変遷	166
第4章 「共生」のカリキュラムの実践動向と評価	
第1節 基礎学校における「共生」の実践事例とその特徴	188
第2節 「共生」のカリキュラム実践を支える諸条件と 94年度版以降の動向	214
第3節 スウェーデンの「共生」のカリキュラムに関する評価	225
終章 結論	
第1節 研究成果の要約	244
第2節 本研究の示唆	255
文献一覧	265